

## 現代の

## ことば

いなが しげみ  
稲賀 繁美

妖怪がブームとなって久しい。だがそもそも妖怪とは何なのか。

妖怪とは計測不可能な超自然現象であり、数値化にならないモノであり、明るみに引き出せば雲散霧消してしまい、目にはしかと捉え難い存在を指す名辞だろう。

1848年、マルクスとエンゲルスは「共産党宣言」を刊行した。「欧州には妖怪が徘徊している」と冒頭にある。妖怪は *Gespens* つまり幽霊を指す。それから170年近くを経て、地球は共産主義の妖怪ではなく、金融資本という別種の妖怪、無限に増殖する数値の欲望という悪霊に襲奪された。

ロナルド・ドアの言う「金融に乗っ取られた世界」に人々は「生きている手ごたえ」を喪失している。高橋博之は『都市と地方をかき混ぜる』(光文社新書)で「見えない化物」に蝕まれた都市文明社会の病理を摘出す。われわれの内面に潜み、われわれの目には見えないがゆえに数値化されず、計測不可能なため社会政策からも抜け落ちる闇。はたして我々はこの「怪物」をいかに「退治」できるのか。

近代において人々は闇を退けることが善であり、闇を退治することが進歩だと信じてきた。だがその結果、人々は闇を喪失した。夜の闇を失った日本列島の煌々たる異常さを、気象衛星は写しだす。

闇の喪失は人々に希望の光をもたらしただのか。妖怪たちの跳梁は、むしろ改めて、数値に還元できない

い裏の世界、忘れられた闇の大切さを論ずる候ではなかったか。

国際日本文化研究センター6代目所長の小松和彦は、妖怪博士の異名を取るが、その学者人生を振り返り「妖怪と戯れる」と銘打った。とかく「戯れ」は軽視されがちだ。しかし車軸と軸受のあいだに「遊び」がなければ車輪は回らない。ギリシャ語の「学問」スコレーはもともと「遊楽」の意味。

4代目所長、片倉もと子も「ゆとりぎ」を提唱してきた。妖怪ブームの火付け役、水木しげるは「ねぼけ人生」を推奨した。高度経済成長下にアクセクと働き、余裕を失った現代への警鐘。そこに妖怪復活の源もあった。「のんき」を確保しないことには、社会は機能麻痺に陥る。世阿弥も「せぬ間」にこそ芸の神髄を見いだしていた。

天の岩屋から現れた女神アマテラス。その陽光が闇に包まれていた人々の顔をふいに照らし出す。それが「面白し」の語源だった。闇の彼方から顔を覗かせる半ば不可視の妖怪たち。百鬼夜行の異形どもを「退治」する替わりに、彼らと「面白く」戯れる余裕。

想像力 *imagination* とは見えないものに「像姿」*Bild* を与える陶治の力 *Einbildungskraft* である。妖怪たちは今、現代人を現と幻とを跨ぐ「闇の国」へと、誘っている。

(国際日本文化研究センター副所長・総合研究大学院大学教授兼任、比較文化・文化交流史)

## 妖怪と戯れて

—学的想像力の現在—